



～お葬儀屋さんのひとりごと～

仏教と花の深い結びつきについて

仏教と花には、どのようなつながりがあるのでしょうか。私たちは、お墓参りで何気なく花を供えています。実は、花を供えるという習慣には、仏教的な意味があるのです。

また、仏様の座る蓮華座、「南無妙法蓮華経」という言葉に表されるように、蓮の花と仏教の教えには密接な関係があります。

仏教と花の関係性とは

花は、厳しい自然の中で耐え抜き、美しく咲き続けます。その花の姿が、厳しい修行に耐え悟りを開く、仏教の教えと重なるとされているようです。そのような考え方からお供える花を仏花と呼び、仏壇やお墓などに花を供えるようになったといわれています。

また、残された人が死者の冥福を祈り、弔うためでもあります。仏教の儀式で用いる仏具の三具足では、花を供えるための花立ても入っており、仏教での花の重要度の高さが伺えます。

仏教と蓮の花

蓮の花は、田んぼや沼などの濁った泥水で咲きますが、泥の中から育ち、美しく咲く様子が仏教のあり方に通じるとして、仏教の重要な象徴となっています。

つまり、泥を人間の煩惱や苦しみに見立て、どのような苦難が人生の中にあっても、心を汚れさせることなく美しく生きましよう、という仏教の教えが蓮華には込められているのです。

また、泥水に浮かんで咲いている蓮の花は、仏教の「苦しみや悲しみを経験しなければ悟りを開くことはできない」とする教えも表現されているといわれています。以上のことから、蓮の花は、仏教にとって非常に意味が深い花であることがわかります。

仏花として供えられる花の種類

私たちの身近で、仏教に関わりがある花といえば、お墓や仏壇に供える仏花が挙げられます。仏花として供えるときは、菊の花が用いられることが多いです。その理由は、長持ちして枯れづらいこと、品種改良により種類が多いこと、邪気を払うとされることが挙げられます。また、菊の花が長持ちするのは、日本に古くからあり気候にも合っているから、ともいわれています。

その他、菊以外にも、基本的には長持ちする花が選ばれます。例えば、カーネーション、アイリス、スターチス、スプレーマムなども仏花で用いられます。

仏花に適さない花の特徴

仏花は、この花でなくてはならないと決まっているものはありませんが、それでも、避けたほうがよいといわれる花もあります。

一般的に知られているものは、「トゲがある、毒を持つ、香りが強い」のいずれかの特徴に当てはまる花で、これらは、供えるには不適切だと考えられています。

例を挙げると、バラ、アザミ、彼岸花などが当てはまります。

しかし、最近では、故人の意思をくみ取って生前好きだった花を供えるなど、それぞれが、自由に供養することも多いようです。冥福を祈る気持ちがあれば、仏花として供える花に特に決まりはないといえるでしょう。

